



校長式辞「塵（ごみ）を捨てる人、塵を拾える人」

輝翔館中等教育学校
校長 山口英明
令和4年7月20日（水）
全校集会

4月に新学期が始まり、早いもので4ヶ月が過ぎ、いよいよ明日からは夏休みとなります。今日は、まずこの4ヶ月の間、私が本校に赴任してから、生徒諸君の授業や学校行事、寮生活を見る中で、感じたことを伝えたいと思います。

輝翔館生の印象として、素晴らしいと思う点を3つ挙げてみます。「素直」であること、「優しい」こと、「積極的」であることがベスト3です。特に3番目の「積極的」であることは、なかなか他校には見られないものです。なぜ、本校生が「積極的だ」と思ったかという一例を挙げると、後期課程の講演会を2回ほど体育館で見ましたが、講演後の質疑応答の際に、何人もの生徒が躊躇せずに手を挙げて質問していた様子に、随分と感心させられたからです。他の学校では、「誰も手を挙げなかったら、その時は質問しよう」とか「みんなから笑われたらどうしよう」という心理が働いて、「躊躇せずに」手を挙げるというのは、なかなか見られません。これは皆さんの持つもの凄い長所だと思います。

また、講師の先生に対する質問内容も当を得ていて、終了後に講師の先生から「輝翔館の生徒は随分と質問のレベルが高いですね」、「話を聞く態度がとても素晴らしい」と大変褒めていただきました。人前で質問をするためには、講演内容をよく聞く必要があるし、高い課題意識を持っておく必要があります。将来のグローバルリーダーを目指すためにも、後期課程の生徒だけではなく、前期課程の生徒も、是非、このような自分たちの長所を大切にしてください。

反対に、輝翔館生にもう少し頑張ってもらいたいところですが、「挨拶」「視野の広さ」「誠実さ」の3つです。

「挨拶」は60点、もっと自分から進んで心の込めた挨拶を全校生徒一人一人ができるはずです。恥ずかしがったり、面倒くさがったりせずに自然と実践できるようになってもらいたいと思います。「視野の広さ」については70点、もっと勉強や読書によって自分自身の考えの幅を広げ、いろいろな話を聞いて自己研鑽に励んでほしいと思います。

そして、3つめが「誠実さ」。これも70点。「誠実さ」とは「自信を持って正しい行いをする力」と考えるとわかりやすいでしょう。この「誠実さ」については、3つの中で最も頑張ってもらいたいものだと思います。

この写真に注目してください。

これは、今から8年前、平成26年（2014年）、サッカーワールドカップブラジル大会の時の写真です。試合は、日本がコートジボワールに1-2で敗れましたが、試合後に日本人サポーターが会場内のゴミ拾いをしたことが世界中で話題となりました。試合に負けたサポーターが物を投げたり暴徒化したりすることもある中で、日本人のとった行動に多くの外国人が賛辞を贈りました。

勝っても負けても、日本人がサッカーの試合後にスタジアムのゴミを拾うようになったのは、平成7年（1995年）頃からのようですが、今でも、このゴミ拾いには、外国では清掃員の仕事を奪うようなことをしてはならないという批判もあり、この写真を見ても外国人が手伝ってくれるような雰囲気ではないケースもあります。

ところが、今から4年前、平成30年（2018年）の前のロシア大会では、日本人サポーターがゴミを拾っていたところ、日本代表と同じグループに所属していたセネガルやコロンビアのサポーターがゴミ拾いをしてくれたことが有名になりました。この写真が

その時の写真ですが、この素晴らしい笑顔が、「ゴミを出さないこと、自分のごみは自分で持ち帰ることは、正しい行いだ」という日本の考えに共感してもらった証だと思います。

そして、この画面。世界ランク61位の日本が、予選リーグで世界ランク16位のコロンビアに勝った後の出来事。「コロンビアサポーターが素晴らしかった。何人からもコングラチュレーションと言われた。僕らの青袋取ってゴミも一緒に拾ってくれた。逆の結果で、僕らは出来るだろうか。サッカーの奥は深いね」という日本人サポーターのコメント。このように、お互いがお互いを尊重することがグローバルな視点には欠かせないものです。

誰が見ていようと見ていまいと「正しい行い」をすることは、頭では分かっている、随分と勇気のいることです。誰も見ていないからといってゴミを捨てるのか、ゴミを拾えるのか、その差は実に大きなものです。輝翔館生の全員が、誰も見ていなくても、自分がやるべきことに自信を持って「誠実」に行動する判断力、実行力を身につけることを切望します。

さて、アメリカで活躍している大谷選手の話です。

彼もまた、昨年、試合中にグラウンドに落ちているゴミを拾って、そっと自分のポケットに入れたことがアメリカで絶賛されていました。その中で、彼が高校時代に、「ゴミ」を拾うときに、それは人が捨てた「ゴミ」ではなく人が落とした「運」だと思って拾うようにしているということを、メディアが取りあげ、紹介していました。これは、彼が花巻東高校1年生に作ったオープンウィンドというものですが、オレンジ色の部分に「ゴミ拾い」のことが出ています。

拡大してみると、「あいさつ」「ゴミ拾い」「部屋掃除」「プラス思考」「本を読む」などと書いてあり、皆さんにも出来ることを彼は意識してしっかりと実践していたのだということがわかります。ネットでもほとんどが、そのような考えは素晴らしいと評価していますが、私は、大谷選手は、実はもっと高い次元にいるのではないかと考えています。

確かに、彼にとって、「運」を拾うという考え方は、ゴミを拾うきっかけだったかもしれませんが。しかし、彼が賞賛されるべきことは、アメリカで「何でそんなことをするんだ」「そんなことをして何になるんだ」とどんなに周囲に批判されても、「いや、自分は運を拾っているだけだ」とさらりと答えて、自分が正しいと思うことを実践し続けている「精神力」「誠実さ」にあると思うのです。

戦後の日本は、この日本的な道徳的価値を、世界に出ると恥ずかしがり、わざと見せないようにする傾向にありました。大谷選手は、それを、自然に実践できるところまで到達できている。そこが、彼の素晴らしさであり、凄さでもある。だからこそ、日本の誰もが、彼の活躍に励まされるのではないのでしょうか。

「運」は人を選ぶと言います。

私たちが、「運を拾う」という考えをきっかけにして、彼のように、ずっと、自然にゴミを拾うことのできる実践、つまり、誰にでもできる正しい行いを常に心がけたいものです。

繰り返しになりますが、今日のタイトルは「塵（ごみ）を捨てる人、塵を拾える人」でした。私は、ゴミを自分から拾える人、掃除を一生懸命にする人は、決してゴミを散らかしたくないし、トイレを汚したりはしないと思っています。

皆さんが、勉強すればするほど、部活動を頑張れば頑張るほど、「心が磨かれ」、自然にゴミを拾うことのできる強い精神力、実践力を身につけることが、できるようになってもらいたいと思います。

これから夏休みに入ります。毎日、規則正しい生活を継続することで、「今年の夏はこれだけは頑張った」と自信を持って言えるよう充実した時間を送ることを期待します。

8月22日に、心身共に成長して逞しくなった顔で、全員が元気に登校することを楽しみにしています。